

芸術としての言語

白山 定雄

Sadao SHIRAYAMA

(美術教室)

XVⅡ

つぎに言語を論理的に分析することについてのべてみようとおもう。言語を論理的に分析することの目的は、与えられた命題としての表現を分析し、その分析によってえられた表現の形式を、つぎに表現しようとする命題の形式として使用するという、いわば表現形式の一般的理論を確立することである。しかし、私がここでの命題というのは、かならずしも主語と述語、あるいは主部と述部という形式をそなえた命題のみを意味しているのではない。一般に言語を論理的に分析する場合には、言語というものは、いわゆる文法によって、あるいは文法的に表現されているという仮説がその前提となっている。語るという言葉による活動は、前節でのべたように、ものに転換され、そしてそのものは分析されて語るというものになる。語られるものすなわち言葉としての語は、類似性によって、それぞれグループに分けられ、そしてそれぞれのグループに属する語は、それぞれ変らない固有の意味を与えられた一つの単位のくりかえし、あるいはその転換として取扱われている。言語を論理的に分析するときには、その前提としてさらに三つの仮説が必要である。我われの周辺には、多岐多様な形式の文章が存在するが、つきつめてゆくと、それらは感情を表現するものと、論理を表現するものとに大別することができるというのがその第一の仮説である。いうまでもないとおもうが、ここで大別するということは、すべての表現をそれら二つの表現のうちのいずれか一方のみに属するものとして峻別することではない。たとえば二つの色、赤と白の純色を二つの極として、それらのあいだに赤と白の混合色をいずれの色量をより多く含むかによって、すなわち含む色量の濃度によって段階的に位置づけることができる。ここでは極に近いところにある色はべつとして、他の多く色はいずれの側に立つかによって、同じ一つの色でも、ときには赤っぽく、ときには白っぽく見えるところから、赤を強調して「赤っぽい」ということも、白を強調して「白っぽい」ということもある。文章による表現にもこれと類似した分類の形式をかんがえることができる。たとえばアート・プロパーの作品と数学の定理のような表現を念頭において、それらの表現を二つの極とし、それらのいずれの要素をより多く含むかによって他の多くの表現をそれらのあいだに段階的に位置づけることができる。そして混色の場合と同じように、ここでも同じ一つの表現をときには「芸術的」といい、ときには「科学的」ということがある。つぎの仮説は、同じ意味をもつ言葉、すなわち同義語によって、一つの表現

は、それと意味を同じくするべつの表現に転換することができるということである。いいかえると、同じ意味の表現を二つ以上つくることができるような原理が存在するということである。これは辞典を編集するときの原理でもある。ここでは、一つの語の意味とべつの語あるいは語のグループの意味とを等しくするという作業がなされる。同義語によって意味を変化させることなく、いろいろなかたちで表現することができるという、この表現転換の原理は文章にも適用することができる。すなわち、一つの文章はその意味を変化させることなく、べつの文章によって代用させたり、あるいはそれと取替えたりすることができるということである。つぎに、意味を同じくする二つ以上の文章が存在するとき、それらの中の一つの文章が他の文章よりも、より適切であるとか、それらの中でもっともすぐれているとかいうことができるという、いわば優先選択が可能であるという仮説を第三の仮説としてあげる。しかし文章の優先選択といっても、ここで問題にしようとしているそれは、一つの文章が他の文章よりも、より了解しやすいとか、それらの中でもっとも感動的であるとかいうような意味での優劣によってきまる優先選択ではなく、それは論理学などが提唱している論理のテクニックとその目的、さらにはその原理といったものと照合し、それを根拠にして判断し、決定する優先選択であるので、そのように承知しておいていただきたい。いいかえると、それは論理のテクニックの規制のみが表現の価値を保証するものであるというかんがえを根拠としている優先選択である。この文章の優先選択の原理は、プラクティカルな表現の場では、論理学者よりも、むしろ文章に凝る、いわゆるスタイリストがこのんで採用している。いうまでもないとおもうが、文章の優先選択には、同時に語の優先選択が問題となる。

さて、**Aristoteles**の論理学およびその流れをくむ論理学では、推理がその中核となっている。そして仮説の取扱い方は三段論法であり、その論法に適合させることのできる思考あるいは判断のみが正当であるとかんがえられているようである。このことは、いいかえると、誤った判断をしているようなとき、その判断の誤りの原因をたずねると、それは誤った論理すなわち誤った思考形式によって仮説をたてたか、あるいは、仮説を誤った論理すなわち誤った思考形式によって証明したか、それらのいずれかであるということである。誤った論理すなわち誤った思考形式によって仮説をたてたり、それによって証明するとき判断を誤るのである。近代科学、わけでも最近の数学や原子物理学などの方法論を積極的にとりいれた **Cambridge school** や **Wiener Kreis** などにみられるような分析哲学としての言語学、あるいは分析論理学の各派は、推理の形式的妥当性のみならず、分析の対象となる理論の内容やその論証方法をも課題として取扱う。ここでは思考あるいは判断の誤りは、たとえば三つの異った命題 a , b , c があるとき、それらを同時に主張しようとすることによっておこる誤りである。この誤りは a , b , c を分離して考察することによって是正することができる。そのように考察すると、たとえば a と b は真理であり、 c は誤りであるということが判明するというのである。**Aristoteles** の論理学においても **Cambridge school** や **Wiener Kreis** の論理学においても、その論理のテクニックはそれぞれの立場を主張する、いわば主張の方式を意味し、あの語を使用するよりもこの語を使用する方がよりよいという用語の優先選択は、適用されるそれぞれのテクニックによって規制されている。分析論理学は、その論理的操作を容易にするために、数学にみられるようなサインをつくり、それを体系化することによって表現の領域を確立しようとする。さらにいうならば、近代の

物理学、化学、生物学、地学などいわゆる自然科学が数理的合理主義によって自然を分析し、その事実関係を法則的に表現しようとしてきたように、分析論理学も、言語を同じ方法によって処理し、法則的に表現しようとする。それは、法則的に表現できるようなかたちにつくりかえようとするといった方がより適切かもしれない。それらに共通するところは、ともに科学として数理との融合を主張してきたということである。わけでも相対性理論、素粒子論や量子論など物質や場の生成と構造に関する諸理論が分析論理学の成立と発展に与えた影響は大きい。

言語を科学として論理的に取扱うということろみは、今日の文法や文章論の体系化にみられるようにかなりの程度まですすんでいる。しかし言語の論理的体系化といっても、言語を一つの全体として論理的に体系化するというようなことは、いかなる言語にたいしても望むことはできないであろう。それは人間を、生命をもった一つの全体として合理化することができないということと対応している。すべての人間を、たとえばコンピューターの指示のみによって活動するロボットのような人間につくりかえることは、もともと不可能なことであるし、またそのようにこころみることは愚かなことであるということを理解している人であるならば、彼は論理的体系化のすすんだ言語のみを理想的な言語とはおもわないであろう。論理的に体系化された言語と言語プロパーとのあいだの関係は、いわば感情をもたないためにそれを表現することができないか、あるいは感情をもっているがその表現を禁止されている人と、感情をもち、その表現によるこびを感じ、それこそ生きることであるとかんがえている、私が人間プロパーとよんでいる人とのあいだの関係と対応している。合理的人間を望む人がロボットをつくることで満足しなければならないように、論理的に体系化された言語を望む人は、そのような言語をつくることで満足しなければならない。そして人間が生成的に存続するかぎり、いかに論理的に体系化された言語をつくりだしても、それとならんで他方には、論理的に体系化することができない言語が生成的に存続するということを理解しなければならない。それらのことは、なによりも人間という存在は、どこをどのように組換え、変形させようと、感情をもっているかぎり合理化することができないという、ただその理由によるのである。言語が論理的に体系化された、いわゆる論理的言語と、主として感情表現の言語として、言語プロパーとよんでいるところの言語とに分化し、サインによる表現の体系としての言語と、シンボルによる表現の体系としての言語という二つの体系の言語があらわれた。サインによる表現の体系としての言語を簡略してサインの体系としての言語あるいはサインとしての言語とよんでいるが、この言語は、すでにしばしば言及したように、科学、わけでも数学や自然科学の表現にその典型をみることができる。この表現は古代ギリシア・ローマの昔からlogosあるいはratioとよばれ、日本語で「比」と訳されている。関係の数理あるいは数理的関係を意味する概念と対応している。いいかえると、それは関係を数理であらわしたものとしての「比」のもつ普遍性を原理として、ときには「比」そのものを含めて、ものやことがらのあいだの一般的関係を合法則的にあらわす表現である。これと対極的に、他方にはアート・プロパーの表現にその典型をみるような一つの表現がある。この表現は感情の普遍性に注目し、その普遍性を原理とし、ときには感情そのものを含めて、ものやことがらのあいだの関係を感情適合的にあらわす表現である。シンボルによる表現の体系としての言語、あるいはこれを簡略してシンボルの体系としての言語とか、シンボルとしての言語とかよ

んでいる言語がこれである。そして多くの、多くのというよりすべての表現は、すでにこの節のはじめでものべたように、これら二つの表現のいずれかに属するというよりも、これら二つの表現の典型を二つの極として、それらのあいだにそれらのうち、いずれをより多く含むか、それらの濃度の度合によって位置づけられる、あるいは散在しているとみることができる。またこれもすでにのべたことであるが、たとえば赤色のチントの場合、赤の側から見るか白の側から見るか、それらのいずれの側から見るかによって同じ一つの色もこれを「赤っぽい」といい「白っぽい」ということができることと同じように、言語の場合にも、その表現を科学の観点から考察するか芸術の観点から考察するか、いずれの観点から考察するかによって、同じ一つの表現を科学的に問題にすることも芸術的に問題にすることもできるのである。このことは、言語を人間の精神活動の目標として、さらにそれが表現する至高の価値として、古くから善とともに標榜されてきた真と美に関連させ、いわばそれらを語るために、いいかえると一般的関係を合法的に、特殊な関係を感情適合的にそれぞれしる、あるいは表現するために、いわゆるサインとしての言語とシンボルとしての言語とへ、分化し発展したものとして歴史的に考察することともかわりあいがある。というのはここで赤のチントに相当する表現は、赤と白への未分化な言語として位置づけることができるからである。なお前者の「しる」や「表現する」にたいして「理解する」という言葉を、後者の「しる」や「表現する」にたいして「了解する」という言葉をそれぞれ使用することにより、両者の相違を区別してきた。

人間の論理的能力によって考案された論理的语言は、言語全体からみれば一部分にすぎない。しかし学術のメカニズムが先導してきた今日の文明は、幾何学と数学によって仕組まれているといってもよいほど合理的である。かくしてその表現形式の理想を論理的図式化におく数学や自然科学をはじめ、ひろく学術の表現手段として主要な役割をになう言語に、当然のことながら論理的機能が要請され、ここにその要請にこたえるにふさわしい言語がつくられることとなったのである。この言語は論理性を重要視するがゆえに、その純化の進捗と並行して、感情的表現性を漸次排除していったのである。しかし、我われが觀念的にかんがえる純粋な論理的语言はともかくとして、現実存在する言語は、たとえ論理的语言といえども、感情的価値と無関係ではない。いいかえると論理的语言といえども、それは感情的表現性をもっているということである。というのは、人間の言語であるかぎり、それは感情的表現性から自由ではありえないからである。

精神分析学的に考察する場合とはともかくとして、一般に、我われが、たとえば自分の芸術観をのべるような場合、我われがそれをのべるのは、それをのべる必要があると自分自身決断したからであるというように我われはかんがえる。ここでその思想をのべることの価値をかんがえてみると、それを価値あらしめているものは、その真理ではない。我われがそれをのべるのは、それが真理であるという理由によるのではない。いいかえると、それが真理であるということは、その真理をのべることの理由ではない。それが現在の状況の中で重要である一つの真理であるということが、それをのべることの理由なのである。また思想をのべる場合、我われはそれをのべるために言葉すなわち語の選択をかならずおこなう。語の選択なしに我われは思想をのべることはできない。いいかえると我われが思想をのべるということは、我われがそれぞれの個人に特有の語の選択によって思想を形成的に表現するということである。形成的に表現するということのうちには、その思想がたんに真理で

あるということを、音声の調子によって感覚的、感情的にも表現するということも含まれている。このように、ある思想をのべるときには、語の選択と、それと同時に音声の調子の選択がなされるのである。この場合、もしのべる人が私であり、その相手が私自身であるとすると、私がのべる語やその調子は、「これは重要な真理である」ということだけではなく「これは私にとって重要な真理である」という感じを表現し、私が私以外の人へのるときには「これは重要な真理である」ということだけではなく、「これは皆さんにとって重要な真理である」という感じを表現する。同じようなことを語っても、語る内容を聞く人に理解させることが巧みである人は、語や音声の調子、ジェスチャーなどの選択に留意する人である。すなわちその人はその人に特有の感觸のある精妙な感情表現をおこなうことができる人である。人により、またときにより、我われは、確信して語り、怒って語り、いらいらして語り、楽しく語り、おろおろと臆して語るなど、語る内容は同じようなことであっても感情をまじえ、感情的に語るのである。このことは、しかし語る人の側だけの問題ではない。同じような内容のことを、同じ人が同じような語り方で語るのを聞いても、人により、またときにより、我われは疑惑をもって聞いたり、涙をながして聞いたり、さらには語る人のジェスチャーからにわどりのしぐさをおもいだしたり、くまの歩きぶりをおもいだしたりなど感情的にもイマジネーティブにも聞くのである。同じ内容のことを同時に聞くときでも、我われはそれぞれに聞くのである。いいかえると主観的、個人的に聞くのである。しかし、我われが言葉すなわち語を語するという行為のかわりに、文字によって書くという行為によって表現をするときには、感情あるいは感情的側面の表現はいちじるしく制約される。たとえば「水は消化液として使用されるが、水は高度な可燃性をもつ水素と、それを可能にする酸素とからできているのである」ということを語るといふ行為によってあらわすときには、音声の調子やジェスチャーなどによって、科学的事実のみではなく、それにたいする感情的態度も同時に表現することができる。一般に重要とおもうことがらにたいしては、ときにはおそれるような調子、哀願するような調子、あるいはどなるような調子で語る。また新しい思想を発表するようなときには高揚し、生气あふれる調子で語る。しかし論述する内容は同じでも、それを語ることによってあらわすのではなく、文字を使用し、印刷してあらわすと、いいかえると、語られる言葉としての語によるのではなく印刷された文字としての語によってあらわすと、「どのような調子の音声で語ったらよいか」といったような、そのような表現の部分で了解されることがらや感情はあらわされないままにおわってしまう。活字であらわし、その印刷された文字を黙読するといったような、いわば語る人と聞く人のいない表現では、言語のもつ主要な表現の部分は削除されていることになるのである。

XVⅢ

すべての表現はこれを感情的側面から考察することが可能である。その場合には、たとえば数学にみられるようなもっとも論理的表現といえどもその例外ではない。その理由は、論理的表現もまたその思想へ感情の充填を促すからである。いいかえると理論というもののは、芸術作品のように感情の表現ではないけれども、たとえば化学方程式の中には感情をあらわす部分は存在しないけれども、理論とかかわりあいをもつとき、我われはそれと関

係のない、むしろそれが積極的に忌避しているはずの感情を同時に体験してしまうのである。体験してしまうというよりも体験しようとするといった方がたしかかもしれない。さてこれはごく一般的なことであるが、感情、すなわち大きくいって快あるいは不快のいずれかの意識は、活動と対応しており、活動の多岐多様と対応し、さまざまな様態がかんがえられる。赤い色を見ると、それと同時に恐怖を感じるといったような場合の感覚的データへの、感情の充填は、オートマティックな印象的反応として無意識的である。しかし、これにたいし思想への感情の充填は、意識によってコントロールされた言語活動によっておこなわれる。雷鳴を聞いておもわず叫んでしまうとか、事故を見ておもわず身振り手振りをしてしまうとかいった知覚と同時に起こる感覚的感情の表現、いかえると感覚的データへの感情の充填は非論理的におこなわれる。これにたいし論理的表現としての思想への感情の充填は、論理的におこなわれる。

少年の頃、Archimedesの浮力の発見にまつわるエピソードを読んだことがある。わけでも重力と浮力との関係についての問題を解決し、*Eureka!* と叫んで浴槽から街路へ裸のままとびだしていったという部分はいまでもよくおぼえている。さてその事実のほどはここでは重要ではない。ここで私がのべたいのはそのような場合の表現一般についてである。Archimedesのかかる行動の原因となった感情は、感覚的データに直接充填された感覚的感情ではない。それは科学的問題を解決したことによってうまれた感情である。いい方をかえると、それは論理的言語からうまれた感情、すなわち論理的言語による表現としての思想に充填された感情である。知覚によって起こる感覚的感情は知覚を前提とし、知覚する人のみが体験する感情であり、論理的言語活動からうまれる感情は、そこからうまれた思想を理解すること、すなわち論理的言語による表現を理解することを前提とし、それを理解することができる人のみが体験する感情である。

我われが写実的な絵画のもつ写実性やドキュメンタリー映画のもつ事実性に感動するときのそれは、たとえば植物図鑑のイラストレーションの中で概念的に論理を理解するようなどきにおこるそれではなく、直接的に論理を了解するようなどきにおこるそれである。このように論理すなわち関係の方式あるいは関係の秩序は、直接的に了解される場合と概念的に理解される場合とがある。そして前者ではその特殊性が、後者ではその一般性が対象として問題になる。知覚という観点からみると前者には直接的知覚が、後者には概念的知覚が対応する。視覚を論理的次元で表現し、これを視覚言語というときにも、それらとパラレルに二つの表現がかんがえられる。

論理的言語、それも高度に抽象化のすすんだ論理的言語が、その本来の使命には含まれていない、あるいはむしろそれを拒否しているはずの感情表現をおこなうということ、しかもこの感情は思考という行為に特有の感情であるということをも認めることは、さらにすすんで思想の表現は同時に感情の表現でもあるということをも認めることでもある。

XVX

風邪をひくとみかんを求めるとか、胃のわるいときには消化によくないものに食欲を感じないとか、満腹感があるのに食事への誘いをことわりきれず、その結果喰いすぎて健康を害するとかいった卑近な例は、いずれも快を求め不快をしりぞければ、すなわち感情に

したがえばあやまちをおかさないですむというこの事実と生理学や医学が指摘する事実との交点の存在を示唆する。我われが禍根や後悔をのこすのは、理性にさからったときではなく感情にさからったときであるという、このパラドキシカルに聞こえる事実の中には真理がある。功利にさとい理性の甘言に耳をかし、その奸謀におちいることは、よくあることである。

また我われは、たとえば色、線、形といったような、いわゆる造形要素、あるいはそれらの関係によって、明確に識別できたり、注意を促したり、明視度を高めたりする効果や、暖い、冷い、安定している、うまい、まずい、楽しい、悲しいといった感じをつくることができる。さらにまた、我われはルネッサンス時代の芸術とか安土桃山時代の芸術とかいったように、それぞれの芸術に特有の表現の方式をみることによってそれらを区別する。以上のべたようなことがらは、それらが普遍的であるような場合には、それらを一般化するための論理がそれぞれにかんがえられる。このことは、それらを表現として考察するとき、それらはいずれも感覚的あるいは感情的意味をもち、その意味は直観的に了解されるという性質をもつが、それらを成立させるための根拠としての原理を論理的に解明できるということを示唆する。

どのようなかたちによるかは問わず、知性、意志、感情と積極的にかかわりあうような場合、たとえば、正確な概念や法則、正当な意図、目的、動機とそれらの原因や理由、快適な感情などを求めて、あるいはそういったものに拠って表現をおこなうような場合、その表現には意味があるという。そしてその意味と対応し、それを指示し、あるいは表象させるという機能を果たすものを、それぞれサインあるいはシンボルと私はよんでいる。また、ある表現がサインあるいはシンボルとしての役割をになっているような場合、それを言語という。そして一つのサインや一つのシンボル、あるいは二つ以上のサインやシンボルが組合された、より大きな複合的サインやシンボルが一つの原理によって統一されているような場合、私はその表現を思想といい、あるいは、その表現には思想があるという。したがって、思想は言語のあり方の一つであるということもできる。つぎに絵画に若干の例をとり、このことを説明してみたいとおもう。

(つづく)

(昭和56年8月20日受理)